

第6回中村元東方学術奨励賞（2020年度）

選考委員会意見

受賞者 芹口真結子

受賞作 『近世仏教の教説と教化』

選考委員長 中島隆博

本書は、正確な史料読解と地道な調査研究にもとづいて、近世仏教を歴史学の観点からあらたに解明していった労作である。寺院に残る行政文書や聖教、布教資料文献などを駆使して、寺院の僧侶と檀家の関係、本末制度に基づく本寺・中本寺の支配・統制の構造、また書物の流通のあり方を明らかにしている。その中心的なテーマは、幕藩権力と仏教教団の教説の複雑な関係を探求するものであって、従来の「近世仏教墮落論」が前提としていたような、幕藩権力による一方的な仏教統制という枠組みを覆すものである。

とりわけ、出羽国酒田常福寺において起きた公蔵の異安心事件を詳細に追いかけることによって、幕藩権力と仏教教団の教説が相互に関与し合っている具体的な姿を示したことは、重要な貢献である。

また、仏教教団の教説が民衆に受容される流通のプロセスに注目したことも高く評価される。「講録」と呼ばれ四種類のテキストが流通することによって、教説をめぐる議論が高い質を保ちながら、人々の間に浸透していき、それが逆に、教学論争を激化させることになったというのである。この観点は、受賞者がそこで研鑽を積んでいる「書物・出版と社会変容」研究会からもたらされたものであり、こうした着実な共同プロジェクト自体の意義も大きなものがある。

それでも、序章において示されていた「近世仏教墮落論」を克服する課題からすると、やや物足りない面も残っている。一つは、歴史研究に自己限定するあまりに、西村玲や末木文美士などの最近の思想史的な近世仏教研究との本格的な対峙が少ない点である。教理の内容にも踏み込んだ記述をしており、理解も行き届いているように見えるので、今後こちらの方向にも一歩踏み込んでいただきたい。もう一つは、近世仏教と言いながらも実際には17世紀後半から18世紀前半の近世真宗東本願寺派にほとんど収斂しており、他の仏教宗派や仏教以外の宗教的な運動への目配りに欠けている点である。真宗としばしば対照的な位置に置かれた法華宗(日蓮宗)は、幕府がより教学の内容に踏み込んだ統制を行なっているが、近世仏教と言う以上、真宗以外の仏教教団との比較は必要であろう。

こうした望蜀の点が残るとはいえ、文献学的にも行き届いた歴史研究として、充実した論述を行っている点で、本書は中村元東方研究所学術奨励賞に十分に値するものである。選考委員会は一致して、当該賞の受賞作にふさわしいと考える。